

わが国の歯学微生物学の開拓者たち(予報)

米 澤 和 一*

米沢が1975年7月18日、於東京・而至化学工業KK本郷別館ホール、
日本歯科医史学会例会にて講演せるものに準拠しての記載である。

(1)

イーストレキにより歯学が日本に渡来してから115年になる。歯科の基礎学としての微生物学は、終戦時までにはすでに世界の水準に達していたようであるが、齲蝕症の原因など口腔細菌学についてみると、終戦時までには一応の体系をととのえたに過ぎないのである。あえて歯学微生物学とここでうたったのは、歯学に必要な微生物学・免疫学のジャンルにまたがる口腔細菌学を志向したためであって、口腔免疫学も当然のこととして含まれる。ここにいう開拓者たちとは、明治21年から昭和28年末までの66年間において、東歯、日歯、大歯、九歯、日大歯、医歯大歯、の6校卒業者とその教官がもたらした学位論文の著者と、東大・慶大の歯科・口腔外科関係のそれらを意味するものである。わが国では明治21年に始まる帝大評議会推薦の医学博士号は、同31年に至る11年間にその保持者38名を数えるが、衛生・細菌学の知名な学者はその二、三に過ぎない。いずれも東大卒業者であって、初年度に医博号を得た10名の中に緒方正規がいて、緒方規雄の実父であり、次回推薦の北里柴三郎とは共に本籍・熊本県で東大卒という間柄である。その東大であるが、医学部の起源は明治2年大学東校であり、同10年東京大学、医学士号は同12年、帝国大学は同19年、同36

年には大学病院に歯科が開設され、石原 久がその主任教授となられた。東大医学部では、明治18年細菌学をわが国へ輸入した緒方正規が衛生学教室の開祖であり、横手千代之助が同教室を継承した。その弟子が別に東大細菌学教室を創設したもので、竹内松次郎が初代主任教授、その他谷 友次らは金沢医大などへ出向し各医大に細菌学教室を創設している。

(2)

歯学微生物学の開拓者を挙げるに際して、この順序として東大歯科・口腔外科教室のそれから始めることとしたい。佐藤三吉外科出身の都築正男が石原の後継者となり歯口科と細菌学の両教室の連係が緊密となると、舟生秀夫はヒト放線菌症の細菌学的研究で、綾部松次は口腔の紡錘菌、村田真道は口腔のアスペルギルスの研究で3弟子揃って学位を得た。都築の後継者・河野庸雄や、戦後だが坂村友三は、細菌学で学位を得ている。

東大と言えば当然のこととして慶大を挙げねばならない。両大学の歴史の古さは似たものだが、医学部の創設は慶大の方は随分遅れて大正9年である。すなわち明治20年勅令13号による学位令、同31年勅令344号のそれには関係なく、大正9年勅令200号による学位令が慶大医学部の場合に該当するのであって、卒業生が出て、始めて論文審査を経て文部省の認可を得、医博号授与したのは大正11年であり寺田正中は翌12年学位受領と記録されている。歯学出身での医博第1号は同12

On the Pioneers in Oral Microbiology in Japan.
(Preliminary Report)

* Waichi Yonezawa 東京歯科大学

年慶大で花沢 鼎が得ているが、次いで佐藤運雄が昭和3年、重浦卓一は同8年、国分史倭は同9年であった。細菌学の源流では山元謹吾は12年、白土寿一13年、尾形利二15年、木村吉太郎・堀内富雄は各21年、平田重吉24年、菅井定昌25年、坂本豊美27年である。上記の山元以降の全員は、初代医学部長・北里柴三郎、二代・北島多一といった北里研究所創設の大細菌学者に配するに細菌学教室主任が、秦 佐八郎、小林六造と言った北研のベテランであり、後日牛場大蔵が小林の後継者となられたものであって、一定期間同教室員となり、または岡田 満の慶大病院の歯科ないし大学予防歯科研の正木 正のもとで勉学し論文を完成されている。重浦の開拓した口腔寄生原虫の研究は寄生虫の小泉 丹教室でなされ、後継教授は松林久吉である。その他、原虫で学位を得たのは中村保夫・東条 清、細菌では鈴木弘造・本多英之祐である。

(3)

明治23年創立の東京歯大の前身・高山歯科医学院で細菌学を講じておられたのは遠山椿吉で、顕微鏡院の開設者でもある。その弟子が奥村鶴吉そして中井武一郎・杉山不二・藤正政人・長谷川慶蔵・米沢和一・佐藤新一・松川男児・小山康夫と流れているが、他方慈恵医大細菌学教室の祖とも言えるべき綿引朝光、その後継者・寺田正中の指導を受け、また野口英世・三田定則・高野六郎のアドバイスも得て齶蝕細菌学等の論文を完成している。別に東大・佐藤外科出身の福島尚純は三田の指導のもとで歯髓の血清学的研究を完成し、米沢は終戦前より谷恩師の金大の細菌学教室にいた関係で、野村 稔・中村正夫・中田 尚・湯本 実が金大で学位論文を完成しているし、八木 実も慈大寺田教室で歯髓の組織培養に成功し、山崎謙・山崎浩重は慈大・石川光昭教室で実験的過敏性現象で各学位を得ている。遠藤辰三と小山は東北大で、陳 増全と松村正澄は京大で、細谷省吾門下の松岡辰男は東大で、春野 屯は九大で各学位を得ている。昔の伝染病研究所でワクチン作りに献身していた高橋市五郎は新潟で論文通過した。その他、免疫・血清学の分野で伊藤五郎・川

越久雄が学位を得ている。

東歯といえば日本歯科大学を挙げるのが順番であるが、戦前に伝研の二木謙三のもとで学位論文を完成された所 敏一（一時は永田姓）を想起する。かつ伝研の矢追秀武・宮本正治が教鞭をとっておられた一時期もあった。戦後の口腔細菌学の教授は日歯出身の国分史倭であったが、引退後は佐藤新一、その後継者は昭和50年6月16日逝去の広木彦吉である。別に日歯卒で戦前に北大・中村豊教室に入り学位を得た石黒慶之助あり、戦後その継承者・中野 弥は母校新潟歯学部教授に望まれていたが、昨年5月私は岩手県衛生試験所長の君の病床を見舞った後やがて逝去といった不運につきである。千葉大・東邦大と定年になられて余生を日歯大の細菌学教室作りにかけられた緒方規雄も先年逝かれた。中野と相前後して東京医大より日歯大入りして細菌学教室作りに共に励んだ菅沼 仁も学位を得て去っている。もっとも日歯出身者であって母校外でユニークな業績で学位を得た者に、佐野秀道・西塚忠義・三留光男・涌井正一・北川庫二・庄司泰基・大沢 弘・堀田忠義・宮越 等・斎藤長門・榎本義文あり、母校教授級では黒河内敏三、園山 昇がいる。

(4)

次は大阪歯科大学の番である。余談ながら大阪の阪は明治以前は坂であり、隆盛な町に発展するよう願って改訂されたとき、大阪大学医学部細菌学教室創設者ともいうべき谷口腴二、その弟子の畑 孝一郎・細川正一らが歯大で細菌学を講じたもので、歯大の教室作りは梅本芳夫、藤原美津夫、青木千春によって始められ、梅本のみ歯大に定着した。梅本の協力者は森 政和である。戦時梅本が兵役で教室不在中は一年後輩の土居信久が助けている。高木芳雄は名大へ、竹田三郎・前田嘉正・富田捷治・木村一平・尾関 滋は京都府立医大へと各歯口科教室にたてこもって学位論文を完成している。その他、岡林 明・中島徳三郎も学位を得ている。

歯大と言えば九州歯科大学を扱わないわけには参らぬ。小川政修と登倉 登の九大細菌学教室の創始者が始め九歯で細菌学を講じた。小川の後任

教授・戸田忠雄は占部 薫・貝原守一らとコンビで継承して九歯の細菌学教室を育成した。大曲靖夫・宇都宮和喜・片岡繁男と言った九歯卒が次々と学位論文を完成した。九歯の創設者・国永正臣の継承者で日歯出身の永松勝海も始め口腔細菌学を講じた。松尾 忠・秋貞泰輔も各ユニークな学位論文を完成している。石（天）泰三は母校を離れて台北大で学位を得ている。

(5)

地方から再び舞台は東京に移って日大歯学部と言及したい。創立者・佐藤運雄については慶大医学部のくだりて述べたが、細菌学者作りの名人でもあった。すなわち縁故の細谷省吾のいる伝研へ長 親幸・下田 亮・押鐘 篤・河内全春・安藤正一・出口 朗・三宅忠雄・藤原忠喜を送り込んだ。逆に終戦前・後に亘って宮崎正之助・飯高孔を伝研から迎え入れた。細谷の没後、秋葉朝一郎を一時東大より指導者として迎えたりもした。母校を離れて馬淵 博は学位論文を作り名大へ提出してもいる。その他、川西兼敏・村田 清・安岡正・後藤正二郎・原 政保・唐司 蔵人・島尾二・加藤郁郎・中村省三・豊村伝蔵・飯村正義・桑原寅次も学位を得ている。

最後に医歯大歯学部、戦前の東京高等歯科医学校に言及することとする。すでに東歯の奥村は島峯 徹の東大卒の前年たる明治37年渡米・留学を命ぜられており、ペンシルバニア大学では細菌分類学の祖バーギー教授直々の特訓を受けたときいている。島峯は明治40年渡独、ミラー教授の去ったベルリン大学歯科に留学した。同42年プレスラウ大学に転じ、後日医博号を得た第二白亜質の論文を完成した。同44年同大学衛生学プайフェル教授につき口腔細菌ならびに梅毒病原スピロヘータの純培養に成功されたが、相前後して米国で成功の野口のそれもあり、今日では両者の純培養株のいずれが真の梅毒病原体なりやは判定しがたい。大正3年末に帰国の島峯は、やがて長尾 優らの協力を得て東京・一ツ橋に文部省歯科病院を

創設し、次いで昭和4年東京高等歯科医学校の創立ともなるが、帰国の翌大正4年秋、野口の一時帰国とも重って、長尾も一枚かんで梅毒病原体純培養のプリオリティが争われそうになったとも伝わっている。東高歯の初代細菌学教授は長谷川秀治、2代は清水文彦で各伝研より見えたもの。東風睦之・西村治雄・竹内孝雄・武井 盈は初代系であり、森田秀夫・渡辺五郎は純口腔細菌学畑の2代系である。大西正男は卒後兵庫県に帰郷して開業していたが、終戦近くに母校に呼び戻されて3代目を継ぎ、今日では名大出身・堀川高大に譲って予防歯科講座を創設した。板倉文弥・楳林 寛・小林好吉は東北大で、吉池一郎は金大で、斎藤孝一と斎藤 豊は新大でユニークな分野開拓、試験合格の有道知行は放線菌病巣感染の論文を完成し各学位を得ている。その他、河野重成・岡野光雄も学位を得ている。

医学出身では、牛窪武男は京都府立医大の歯口科で、岩手医大歯学部の富沢（旧清水）万之助と阪大歯学部の小谷尚三も各学位論文を完成していることを付言する。

参考文献

- 1) 日本医学博士録，東京・中央医学社版（昭29発行）
- 2) 同上，東京・東西医学社版（昭19発行）
- 3) 日本博士録，東京・教育行政研究所版（昭31発行）
- 4) 同上（昭45年分），東京・広潤社版（昭48発行）
- 5) 林 正秀：医学博士の社会的機能の歴史的変遷。医学史研究，4号，昭37.3.
- 6) 米沢和一：新学位令による学位受領者について。東歯大同窓会報，第160号，昭49.8.
- 7) 佐藤伊吉：ある思い出（その三）。日本歯科評論，第391号，昭50.5.
- 8) 宇留野勝弥：遠山椿吉。非売品，昭43.11.
- 9) 奥村鶴吉：野口英世。岩波書店版，昭8.7.
- 10) 長尾 優：島峯 徹先生。医歯薬出版KK，昭43.4.

以 上